

【第137回生涯教育講座】

ここまで進んだ小児がん診療の現状と今後の課題

たけ たに たけし
竹 谷 健

キーワード：小児がん，チャイルドライフスペシャリスト，晩期障害，BiTE，CAR-T

要 旨

小児がんは、14歳までに発症したがんとして定義されています。日本で2018年度にがんを発症した患者さん（980,856人）のうち、小児がん患者さんはそれぞれ、2,094人（約0.2%）と、すべてのがん患者さんの中では非常に少ない患者数です。しかし、亡くなった患者さんは、全世代376,425人、小児257人であることから、治療などの進歩により小児がん患者さんは生存する可能性が高いことがわかっています。一方、小児がんを診療する目標である、「小児/AYA世代のがん患者さんを心身ともに合併症なく健康に救う-intact survival-」を達成するためには、晩期障害および難治性小児がんに対する治療に関して克服すべき問題があります。そこで、この稿では小児がん診療の現状と課題について、述べたいと思います。

【小児がんの現状】

小児がんの子どもたちは前述しましたとおり、年間2,000人程度発症します。罹患率が高いがん種（表1）として、白血病が最も多く、脳腫瘍、リンパ腫の順番です。造血器腫瘍以外の小児がん（0~18歳未満）の発生頻度では、脳腫瘍が全体の約1/3で、胚細胞性腫瘍、神経芽腫の順です（図1）。興味深いことに、小児がんは年齢ごとに好発するがん種が異なります（表2）。どうしてもこの時期に好発するか詳細な理由は明らかではありませんが、正常な組織や臓器が発達する時期に

その組織や臓器にがんが発生しやすい傾向があります。乳児期は臓器が発達しますので、脳、肝臓、腎臓などの臓器にがんが発生しやすいですし、幼児期はリンパ組織が発達しますので、急性リンパ性白血病が多く発症するなどです。

小児がんの初発症状（表3）として、発熱が続く、貧血、血小板減少などが一般的ですが、成長発達に伴う症状と間違いやすい症状が2つあります。1つ目はリンパ節腫大です。リンパ節や扁桃腺などのリンパ組織は10歳ごろをピークに成人の約2倍程度も大きくなります。特に、表在リンパ節である頸部リンパ節は感染などを契機に大きくなると視診や触診で所見として取られやすいため、悪性との鑑別が悩ましいことがありますが、長径が3~3.5cm以上を認めるリンパ節腫大は、悪性

Takeshi TAKETANI

島根大学医学部小児科

連絡先：〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部小児科